

異性装におけるジェンダーバイアス

－歴史的な観点から考える－

現代では性別とは極めて複雑で曖昧なものである。しかし歴史を俯瞰し眺めるのならば人類は男と女の2つに分類されてきた。2つの性別は生物学的違いのみならず社会的にも区別され、後天的に特徴づけられていった。服装はその代表的な例といえる。性別と服装が結び付けられた社会で異性装という行為は身体的性別を越えるための手段となり得たのである。異性装者が性別を越えて得ようとしていたものを追及し、その背景にあるジェンダーバイアスを明らかにすることがこの研究における目的である。

本研究では近世後期のヨーロッパ地域にて異性装を行った事例者を対象とした。そして異性装事例の共通点を探し出し、時代背景を考慮しながら考察を行った。次に同時期の演劇という文化における異性装の扱われ方に着目し、ヨーロッパ社会に根付くジェンダー観についての検討を行った。

結果として、男装と女装はどちらも身体的性別を越えるための手段であるが、事例数や動機には明確な差異が見られる結果となった。女性は性別役割分業の意識が強い社会で男性の領域に入り込む手段として異性装を用いたが、その多くは貧困という経済的理由を動機としていたのである。対して男性の異性装は女性の領域に踏み込むことを目的にはしておらず、女装が男らしさを強調とする役割を果たした事例さえ存在していた。

この結果にはキリスト教の考えに由来したヨーロッパ社会における異性装に関する人々の認識やジェンダー観が影響していると考えられる。異性装は男女間に厳格な社会的格差やジェンダーバイアスが存在していたからこそ行われたものである。すなわちジェンダーバイアスの存在が異性装という文化を生み出したのである。